

合 同

No. 489

「傷をもって共に生きる」

日本キリスト合同教会教師

岸本 茂雄



「それから、トマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい』」（ヨハネによる福音書20章27節）。

主イエスが復活された事実は4福音書のほか、新約聖書の多くの書物に記されています。しかし、復活のからだに傷が残っていることを示す記述はここだけです。主イエスは、釘を打ちつけられた手の傷や槍を突き刺された脇腹の傷、痛々しい傷跡をそのまま残して復活されました。神は全知全能ですから、傷のない完全な姿で復活させることもできたはずで、それなのになぜでしょうか。傷が無ければ、弟子たちは主イエスだとわからなかったかもしれません。逆に、主の復活が初穂なら、わたしたちが復活するとき、傷のない姿に変えられるという希望になるかもしれません。しかし、主イエスは傷のあるまま復活されました。それにはどういう意味があるのでしょうか。

東日本大震災で多くの教会が被災しましたが、津波に襲われ、大きな傷跡を残した教会がありました。何かで聞いたのですが、その教会の牧師の言葉が印象に残っています。「この教会を傷跡の残る教会にしたいんだよ。傷は癒えても残るんだよ。元通りには戻れないんだ。蘇られたイエスさまも傷を残しておられたのだから」。

地震や津波や洪水などの自然災害ばかりではありません。わたしたちの周りには、わたしも含めて、人生の色々な場面で心や体に傷を負い、傷を抱えて生きている人が大勢います。病気や障害や怪我など外見的にわかる痛みや弱さや不自由さもあるでしょう。しかし、普段の生活やお付き合いの範囲では表

面的にはわからない心の傷を隠している人も多いのです。人間関係のトラブルや理不尽な出来事、愛する人の死、仕事などでの失敗や挫折が心の傷となっている人は多くいます。さらに、神への不信仰や、悔い改めても罪を犯す弱さが心の傷となっていることも多いのです。わたしたちは誰もが傷を持っています。誰もが生きる中で傷を負い、傷が残る続けるという点で、わたしたちは兄弟姉妹であり、家族であると言えるでしょう。

ところが、この世では、傷をもって互いに傷つけ合う、むごいことがしばしば見られます。他の人が隠している傷をあばいて、嘲笑したり、貶めようとしたりする風潮があります。醜い足の引っ張り合いや中傷合戦がなされるのです。

一方で、わたしたちは傷を忘れがちということもあるでしょう。傷を見ず、無かったことにすることはないでしょうか。自分の傷にも、他の人の傷にも無頓着なのではないでしょうか。そして、相手の傷に無頓着で、配慮のない言動によって相手を傷つけることが起こるのです。

復活された主イエスのからだには傷が残っています。その傷は、わたしたちの罪を贖うために負われた傷なのです。主が傷を残して蘇られたのは、わたしたちが傷を負って生きていかなければならない現実を、神が認め、支えてくださっているからではないでしょうか。もし、主イエスが傷の無い完全な姿で復活されたのなら、無傷の主は傷だらけのわたしたちとは関係ないと言えるかもしれません。

主イエスが傷を残して蘇られたのは、それぞれに傷を持つわたしたちを、傷をもって共に生きるという生き方に招くためではなかったかと思われまます。それぞれに傷を持つわたしたちは、その傷によって、共に生きることができないのでしょうか。傷によって傷つけ合うのではなく、互いの傷に思いやりをもって愛し合うことはできないのでしょうか。互いの傷によって、わたしたちは響き合い、支え合い、共感し、愛し合うことができるのではないかと思うのです。

傷を残して復活されたキリスト・イエスは、トマスに、そして弟子たちに、傷のある手と脇腹をお示しになったように、わたしたちにもその傷を示しておられます。そして、傷を残して蘇られた、このキリストは今もわたしたちと共におられるのです。